

茨城県教育財団文化財調査報告第302集

田 向 遺 跡

主要地方道常陸那珂港山方線新設事業地内
埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書

平成 20 年 3 月

茨城県常陸大宮土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第302集

た 向 遺 跡
むかい

主要地方道常陸那珂港山方線新設事業地内
埋蔵文化財調査報告書

平成 20 年 3 月

茨城県常陸大宮土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、県内各地域の交流や連携を促進し、均衡ある県土の発展を図るため、一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めております。

その一環として、茨城県常陸大宮土木事務所は、水戸・ひたちなか都市圏の中心部に集中する交通を分散・誘導する幹線道路とすべく、主要地方道常陸那珂港山方線新設事業を決定しました。

この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である田向遺跡が所在することから、財団法人茨城県教育財団は、茨城県常陸大宮土木事務所から同遺跡発掘調査について委託を受け、平成19年8月に実施しました。

本書は、田向遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県常陸大宮土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、東海村教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 人 見 實 徳

例 言

- 1 本書は、茨城県常陸大宮土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成19年度に発掘調査を実施した、茨城県那珂郡東海村大字照沼527番地の2ほかに所在する田向遺跡^{たむかい}の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調査 平成19年8月1日～平成19年8月31日
整理 平成19年9月1日～平成19年9月30日
- 3 発掘調査は、調査課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 藤田哲也
主任調査員 小川貴行
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、主任調査員小川貴行が担当した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X軸＝＋48,120m、Y軸＝＋68,360mの交点を基準点（A 1 a1）とした。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。




大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ、a、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI－住居跡 SK－土坑 P－柱穴・ピット
遺物 TP－拓本記録土器 DP－土製品 Q－石器
土層 K－攪乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は300分の1、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土		火床面
	竈部材・黒色処理		
●	土器	○	土製品
□	石器	-----	硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺物観察表・遺構一覧表の表記については次のとおりである。

- (1) 現存値は（ ）で、推定値は[]を付して示した。計測値の単位はm、cm、gで示した。
- (2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率や写真図版番号、その他必要と思われる事項を記した。
- (3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 「主軸」は、竪穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については、長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は、主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N－10°－E）。

抄 録

ふりがな	たむかいいせき								
書名	田 向 遺 跡								
副書名	主要地方道常陸那珂港山方線新設事業地内埋蔵文化財調査報告書								
巻次									
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告								
シリーズ番号	第302集								
編著者名	小川 貴行								
編集機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発行年月日	2008(平成20)年3月24日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
たむかいいせき 田 向 遺 跡	いばらきけん な かくんとうかいむら 茨城県那珂郡東海村 おおあざてるぬま 大字照沼 527 番地の 2 ほか	08341 - 175	36度 25分 50秒	140度 35分 47秒	27m	20070801 ~ 20070831	493㎡	主要地方道常 陸那珂港山方 線新設事業に 伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
田 向 遺 跡	集落跡	古 墳	竪穴住居跡 2軒		土師器, 土製品(支脚) 石器(敲石・砥石・台石)				
	その他	時期不明	土坑	5基	弥生土器				
			ピット	3基	磁器				
要 約	古墳時代後期の住居跡が2軒確認された。当遺跡は新川の右岸に位置する集落であり、立地から北東方向に集落は広がると考えられる。弥生土器片も数点出土しているが、当時代の遺構は確認できなかった。								

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 古墳時代の遺構と遺物	8
竪穴住居跡	8
2 その他の遺構と遺物	13
(1) 土坑	13
(2) ピット	14
(3) 遺構外出土遺物	15
第4節 まとめ	16
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県常陸大宮土木事務所は、那珂郡東海村照沼地区において、常陸那珂港から一般国道245号へのアクセス道路として、主要地方道常陸那珂港山方線の新設事業を進めている。

平成18年10月4日、茨城県常陸大宮土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道常陸那珂港山方線新設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は、平成18年10月13日に現地踏査を、平成18年10月20・26日及び11月21・22日に試掘調査を実施し、田向遺跡の所在を確認した。平成18年12月15日、茨城県教育委員会教育長は茨城県常陸大宮土木事務所長あてに、事業地内に田向遺跡が所在する旨、回答した。

平成19年1月4日、茨城県常陸大宮土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成19年1月15日、茨城県常陸大宮土木事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

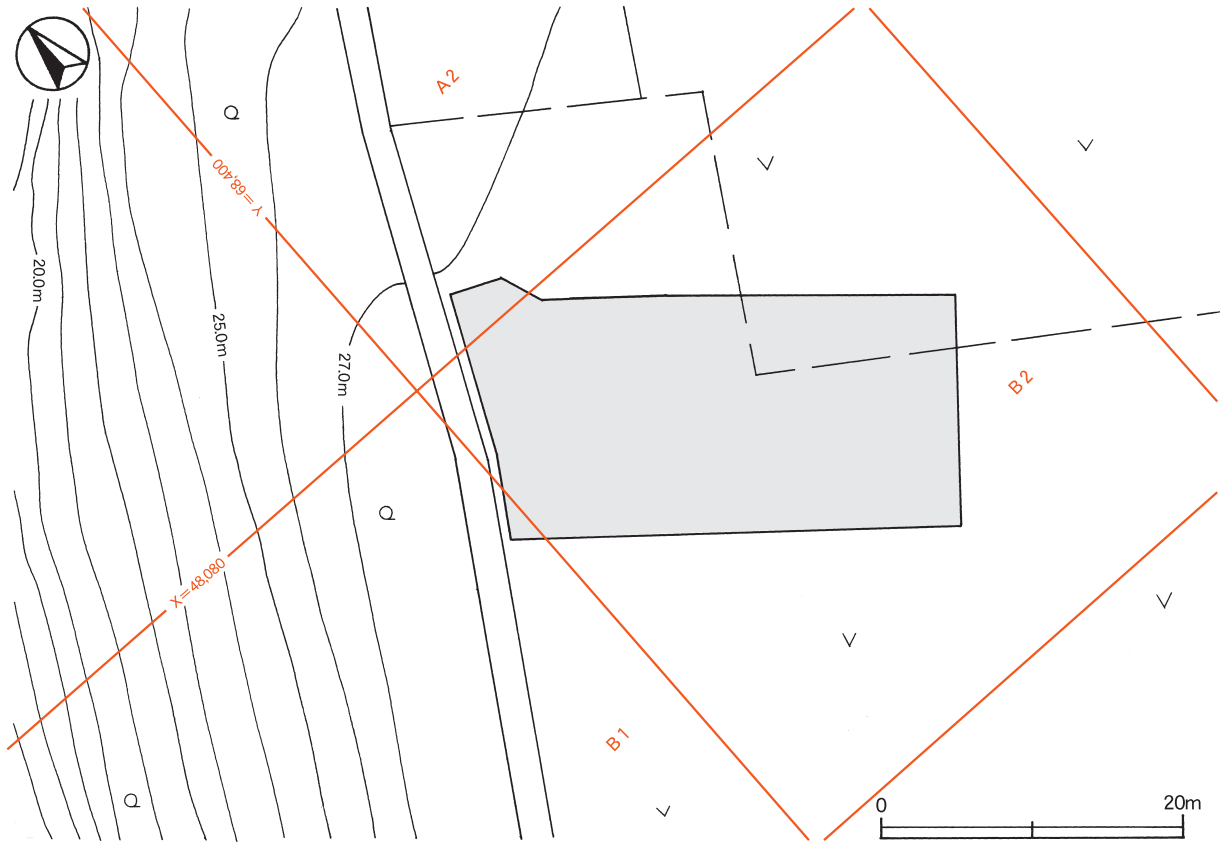
平成19年2月22日、茨城県常陸大宮土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道常陸那珂港山方線新設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成19年2月26日、茨城県教育委員会教育長は茨城県常陸大宮土木事務所長に対して、田向遺跡についての発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県常陸大宮土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け平成19年8月1日から平成19年8月31日まで田向遺跡の発掘調査をすることとなった。

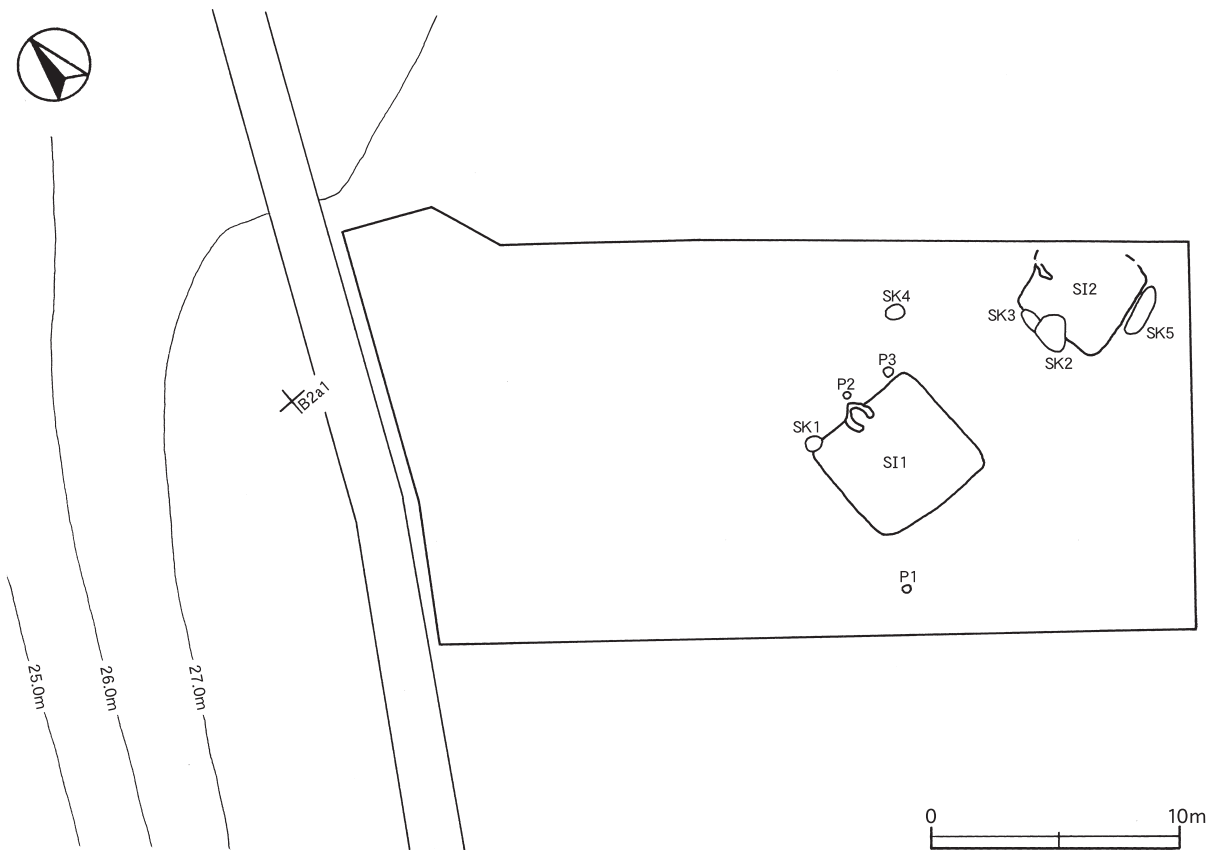
第2節 調査経過

田向遺跡の調査は、平成19年8月1日から平成19年8月31日まで実施した。以下、調査の経過については概要を表で記載する。

工程		期間	
		8月	
調査表遺	準備 土除 構確 認		
遺構	調査		
遺物注写	洗作 真整 業理		
補撤	足調 査収		



第1図 田向遺跡調査区設定図



第2図 田向遺跡遺構全体図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

田向遺跡は、茨城県那珂郡東海村大字照沼527番地の2ほかに所在している。

東海村は、太平洋に面する茨城県のほぼ中央部に位置し、村域の多くは標高30mほどの台地上に位置している。この台地は那珂台地とよばれる洪積台地で、北側を久慈川が東流している。当村の位置は、那珂台地の北東部に当たる。台地は、新川水系の河川によって樹枝状に開析され、複雑に入り組んだ谷津や低地を形成している。

那珂台地を形成している地層は、第三紀層を基盤として、その上に下末吉海進により形成された海成層である見和層、灰白色や青白色の茨城粘土層、さらには関東ローム層が堆積している¹⁾。

当遺跡は、東海村南東部に位置し、新川右岸の標高27mほどの台地上に立地している。那珂台地の東端にあたり、新川より伸びる開析谷が、遺跡の西側にせまっている。遺跡周辺の土地利用状況は、台地部は主として畑地であり、谷部の沖積低地は、主として水田である。

当遺跡の調査前の現況は畑地であり、主に芋畑として利用されていた。

第2節 歴史的環境

当遺跡が位置する新川流域は、古代・中世に村松海岸から細浦や真崎浦まで海が入り込み、入江が形成されていた²⁾。入江に面する那珂台地上には、旧石器時代から近世までの数多くの遺跡が確認されている。ここでは、当遺跡と同じ古墳時代の遺跡を中心に、細浦・真崎浦周辺地域の主な遺跡について概観する。

旧石器時代の遺物は、^{はらやま}原山遺跡（ひたちなか市）〈2〉から、頁岩素材のルヴェアロア型石核が採集されている。また同遺跡では、ゴルフ場造成にともなう発掘調査が行なわれ、頁岩・チャート・安山岩・メノウなどの剥片が出土している³⁾。周辺地域における、この時期の遺跡調査の報告例は少ないが、すでに人々がこの地域で生活を営んでいたことが確認されている。

縄文時代になると遺跡数は増加し、中期から後期にかけて、^{まさき}真崎貝塚〈3〉、^{ごしょうち}御所内貝塚〈4〉、^{ひばら}平原B貝塚〈5〉など、貝塚が形成される。いずれの貝塚も内湾性のヤマトシジミが主体であり、当時の地理的環境を明確に示している⁴⁾。

弥生時代の遺跡は、^{ぶはら}真崎浦北岸の部原遺跡〈6〉から、後期の住居跡1軒が調査報告されている⁵⁾。また、^{すわま}須和間遺跡〈7〉でも後期の住居跡1軒が調査報告されている⁶⁾。弥生土器が採集されている遺跡は比較的多く確認されているが、集落跡の調査報告例はまだ少ない。

古墳時代にはいると、細浦・真崎浦周辺で集落の規模が拡大傾向を示すようになる。^{おちの}真崎浦北岸の小沢野A遺跡〈8〉では、団地造成に伴う発掘調査が行われ、古墳時代から平安時代までの47軒の住居跡が報告されている。そのうち古墳時代の住居は、各時期に消長はあるものの前期から後期までとぎれなく続き、長期間にわたって集落が営まれている⁷⁾。真崎浦南岸では、縄文時代から平安時代までの遺物が検出される^{こうやてらばけ}高野寺畑遺跡（ひたちなか市）〈9〉がある。公園墓地造成にともなう発掘調査が行われ、古墳時代中期から後期にかけての住居跡15軒が確認されている⁸⁾。また、^{ぶはらきた}部原北遺跡〈10〉から確認された住居跡では、弥生時代後期の十王

台式土器とともに、S字口縁を有する甕や小型高坏など複数の土師器が共伴しており、移行期の住居と考えられている⁹⁾。

細浦・真崎浦に臨む台地上では、村々を支配する有力者の存在を示すように、大規模な古墳が作られてくる。細浦の北岸には、村内最大級の規模である全長87mの前方後円墳、権現山古墳〈11〉が位置している。採集された格子目状の叩きを有する埴輪から、時期は中期と考えられている¹⁰⁾。権現山古墳と隣接して、真崎古墳群〈12〉が分布している。8基が現存しているが、近年の調査によってそのうちの1基が、4世紀代に築造された纏向型前方後円墳として報告されている¹¹⁾。また、前述の小沢野A遺跡と隣接する須和間古墳群〈13〉では、12号墳の石室より線刻された水鳥の壁画が発見されている¹²⁾。

生産遺跡としては、細浦の最奥部に位置する馬頭根遺跡〈14〉が須恵窯として知られている。操業時期は7世紀と想定されているが、生産された須恵器は東海村内では確認されていない¹³⁾。また、最近では御所内窯跡〈15〉の調査も行われ、7世紀代の須恵窯と報告されている¹⁴⁾。

奈良・平安時代の遺跡は、細浦・真崎浦周辺で、前述した小沢野A遺跡や高野寺畑遺跡に加え、石橋向B遺跡〈16〉、石橋向C遺跡〈17〉が知られ、8世紀代の住居跡がそれぞれ報告されている¹⁵⁾。この時期になると、特に久慈川流域に遺跡が集中する傾向があり、久慈川河口部が古代交通路と強い関わりがあったものと考えられている。なお、古代の細浦・真崎浦周辺地域は那賀郡石上郷に属していたが、平安時代に吉田神社を中心とする吉田郡の設立時、当地は那賀郡より分離している¹⁶⁾。

細浦・真崎浦周辺地域は、水上交通の要所であり、中世には佐竹氏系真崎氏が、真崎浦に突き出た半島の先端に真崎城〈18〉を築き、対岸には江戸氏系足崎氏が多良崎城（ひたちなか市）〈19〉を居城として、入江に出入する船の監視や沿岸漁民を支配したと考えられている¹⁷⁾。近年では、製塩遺跡として村松白根遺跡〈20〉、長砂渚遺跡（ひたちなか市）〈21〉が当財団によって発掘調査され、両氏も製塩に関与したと考えられている¹⁸⁾。

近世には、真崎浦、細浦が村松砂丘の発達により潟湖化し、幕末より昭和まで干拓事業が行われている¹⁹⁾。

※文中の〈 〉内の番号は、第3図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

（ ）にて市町村名を明示していない遺跡は、東海村域の遺跡である。

註)

- 1) 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 那珂湊』茨城県農地部農地計画課 1991年3月
- 2) 佐久間勇『東海村の民俗』筑波書林 1989年6月
- 3) 勝田市史編さん委員会『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』勝田市 1979年12月
- 4) 松浦隆・茂木雅博ほか『東海村の遺跡』東海村教育委員会 1986年12月
- 5) 茂木雅博ほか『常陸部原遺跡』東海村教育委員会 1982年9月
- 6) 東海村史編さん委員会『東海村史 通史編』東海村 1992年10月
- 7) 茂木雅博ほか『小沢野 茨城県東海村須和間地区における古代集落の研究』小沢野遺跡調査会 1978年4月
- 8) 川崎純徳ほか『高野寺畑遺跡調査報告書』茨城県勝田市教育委員会 1979年3月
- 9) 前掲文献5)に同じ
- 10) 茂木雅博・永井三郎ほか『常陸権現山古墳調査報告』東海村教育委員会 2001年8月
- 11) 茂木雅博・高橋和成ほか『常陸真崎古墳群』東海村教育委員会 2006年10月
- 12) 茂木雅博ほか『須和間12号墳の調査』東海村教育委員会 1989年9月

- 13) 森敦子・茂木雅博ほか『常陸馬頭根窯址』東海村教育委員会 1984年3月
- 14) 小林桃子・茂木雅博ほか『常陸御所内窯跡』東海村教育委員会 2001年3月
- 15) 小川和博『石橋向B・C遺跡』東海村教育委員会 1992年3月
- 16) 前掲文献6) に同じ
- 17) 前掲文献6) に同じ
- 18) a 芳賀友博・寺内久永「村松白根遺跡1 大強度陽子加速器施設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第250集 2005年3月
- b 皆川修・井上琢哉「村松白根遺跡2 大強度陽子加速器施設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第284集 2007年3月
- c 杉澤季展「長砂渚遺跡 常陸那珂港関連用地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第278集 2007年3月
- 19) 前掲文献6) に同じ

参考文献

- ・茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- ・勝田市編さん委員会『勝田市史 原始・古代編』勝田市 1981年9月

表1 田向遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	田向遺跡				○				12	真崎古墳群				○			
2	原山遺跡	○	○	○	○	○			13	須和間古墳群				○			
3	真崎貝塚		○			○			14	馬頭根遺跡				○			
4	御所内貝塚		○		○				15	御所内窯跡				○	○		
5	平原B貝塚		○						16	石橋向B遺跡				○	○		
6	部原遺跡		○	○					17	石橋向C遺跡					○		
7	須和間遺跡			○	○				18	真崎城跡						○	
8	小沢野A遺跡				○	○			19	多良崎城跡						○	
9	高野寺畑遺跡		○	○	○	○			20	村松白根遺跡						○	○
10	部原北遺跡				○				21	長砂渚遺跡						○	
11	権現山古墳				○												



第3図 田向遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院「ひたちなか」5万分の1に加筆）

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

田向遺跡は、東海村の南東部、新川右岸の標高27mほどの台地上に立地している。調査前の現況は畑地であり、調査面積は493㎡である。

確認された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡2軒、時期不明の土坑5基とピット3基である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に3箱出土している。主な遺物は、弥生土器（壺）、土師器（坏・椀・甕・甑）、磁器（碗）、土製品（支脚）、石器（敲石・砥石・台石）などである。

第2節 基本層序

調査区南東部のB 2h6区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は27.5mで、地表から約2.4m掘り下げた。11層に分層され、観察結果は以下のとおりである。

第1層は、黒褐色を呈する現耕作土層で、ロームブロックを少量含んでいる。粘性・締まりともに弱く、層厚は36～64cmである。

第2層は、黒褐色を呈する土層で、ロームブロックを微量含んでいる。粘性は弱く、締まりは普通であり、層厚は4～36cmである。

第3層は、黒褐色を呈する土層で、ロームブロックを微量含んでいる。粘性・締まりともに普通であり、層厚は10～22cmである。

第4層は、褐色を呈するローム粒子を多量に含む層で、今市一七本桜軽石層に該当する層と考えられる。粘性・締まりともに普通であり、層厚は8～16cmである。

第5層は、褐色を呈するソフトローム層で、粘性は強く、締まりは普通であり、層厚は6～16cmである。

第6層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性は普通で、締まりは強く、層厚は18～32cmである。

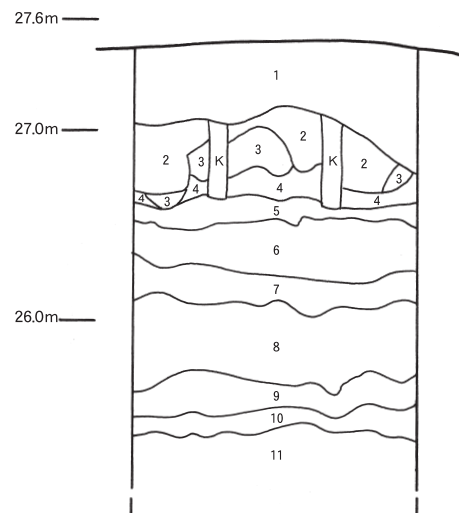
第7層は、黄褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりともに強く、層厚は12～25cmである。

第8層は、暗褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりともに強く、層厚は35～48cmである。第2黒色帯に該当する層と考えられる。

第9層は、黄褐色を呈するハードローム層で、赤城・鹿沼軽石粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりは極めて強く、層厚は12～24cmである。

第10層は、黄褐色を呈する層で、赤城・鹿沼軽石粒子を中量含んでいる。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は6～21cmである。

第11層は、褐色のロームを多量に含む層である。粘土層への漸移層であり、粘性は強く、締まりは極めて強い。下層は未掘のため、本来の層厚は不明である。



第4図 基本土層図

なお、第1～3層は耕作土であり、遺構の多くは第4層上面で確認されている。

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡2軒である。以下、遺構と遺物について記述する。

竪穴住居跡

第1号住居跡（第5・6図）

位置 調査区の中央部B2e5区、標高26.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.11m、短軸4.93mの方形で、主軸方向はN-9°-Wである。壁高は15～21cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が広い範囲で踏み固められている。壁溝が、竈部を除く壁下に巡っている。北東コーナー部床面に焼土粒子の広がり1か所が確認された。焼土の厚さは4cmほどである。また床面から炭化材も検出されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで128cm、袖部幅は98cmである。袖部は、ローム混じりの粘土が主体で、一部が灰色粘土で構築されている。火床部は床面と同じ高さであり、火床面は火を受けてやや赤変している。煙道部は壁外に36cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗褐色	白色粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・白色粘土粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック微量
3 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量	10 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	11 暗褐色	ローム混じり粘土ブロック中量
5 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量	12 暗褐色	ローム混じり粘土ブロック多量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	13 暗赤褐色	ローム混じり粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
7 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化物微量	14 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
		15 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
		16 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量

ピット 11か所。P1～P4は深さ10～14cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで、南壁際のほぼ中央部に位置していることや硬化面の広がりから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P11は深さ10～30cmで、補助柱穴とも考えられるが明確ではない。

貯蔵穴 南壁際のほぼ中央部に付設されている。長径67cm、短径60cmの楕円形で、深さは32cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。上層では、ロームブロック、炭化物、焼土粒子を含む黒褐色の覆土が確認されている。

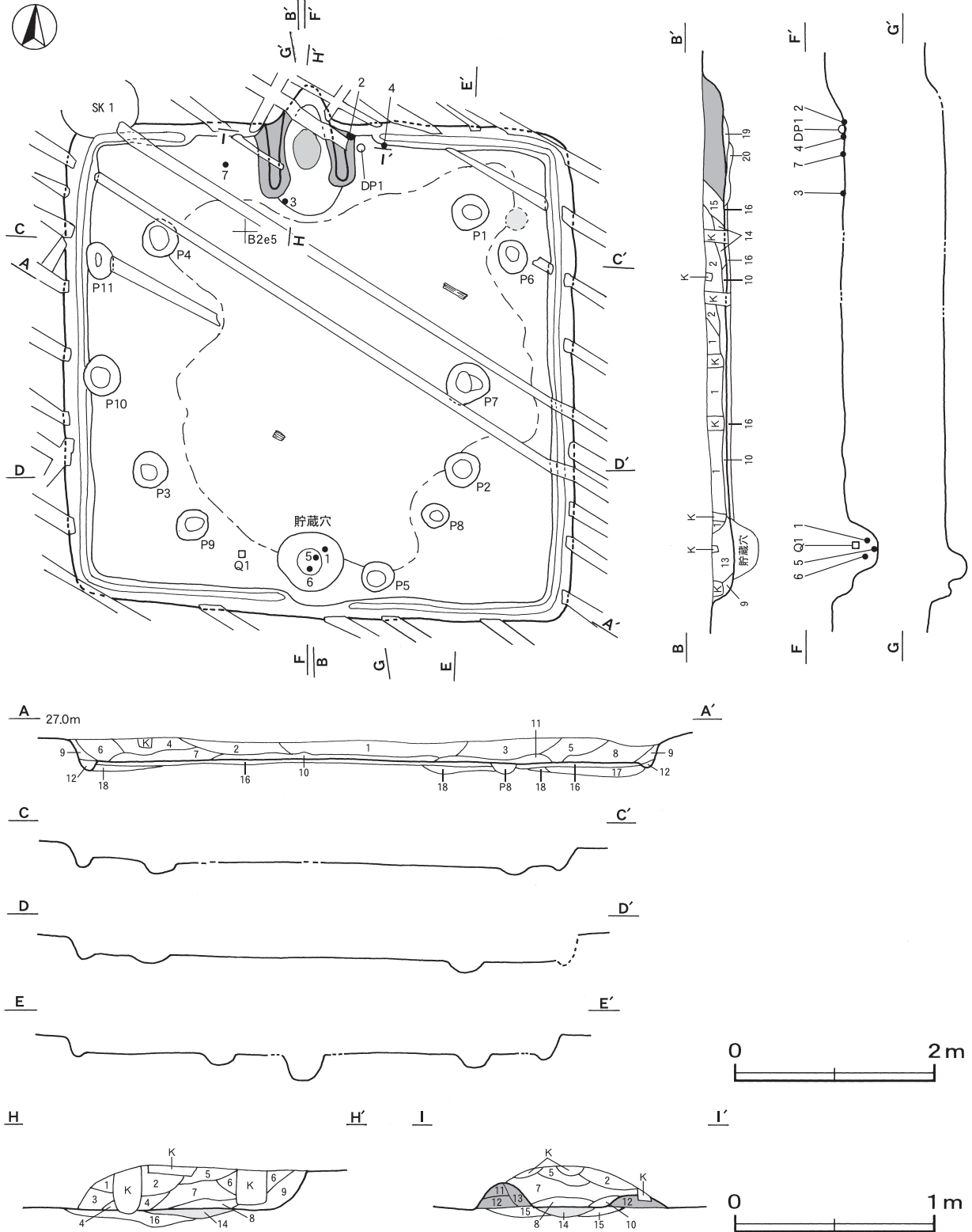
覆土 15層に分層される。各層にロームブロックや炭化物を含み、不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。第16～20層は貼り床の構築土である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック・今市-七本桜バミス少量
3 暗褐色	ロームブロック微量	10 暗褐色	ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック微量	11 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック少量
6 暗褐色	ロームブロック中量	13 黒褐色	ロームブロック・今市-七本桜バミス微量
7 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	14 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量

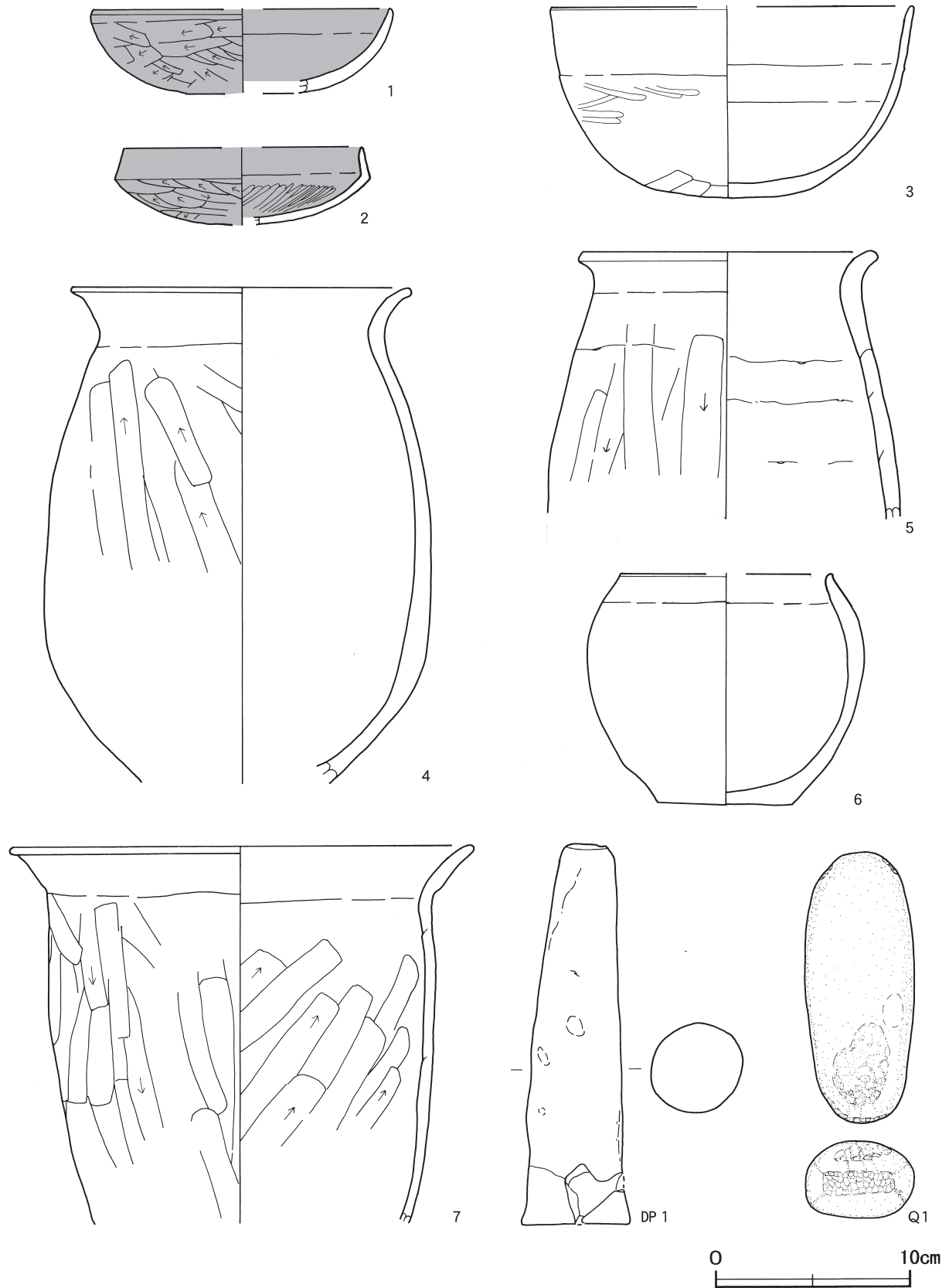
- | | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| 15 黒褐色 焼土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量 | 18 暗褐色 ローム粒子中量, 黒色ブロック微量 |
| 16 暗褐色 ロームブロック中量, 黒色ブロック少量, 炭化粒子微量 | 19 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 17 暗褐色 ロームブロック・黒色ブロック中量 | 20 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片173点(坏15, 椀1, 甕類149, 甌8), 土製品1点(支脚), 石器3点(敲石・砥石・台石)が出土している。また混入した弥生土器片5点が出土している。竈周辺の床面から3が正位, 4が横位, 7が逆位, DP1は斜位でそれぞれ出土している。また貯蔵穴の覆土下層から1・5・6が出土している。



第5図 第1号住居跡実測図

所見 覆土中に炭化物を多く含み，床面から焼土粒子の広がりと炭化材も確認されており，焼失住居と想定される。時期は，出土土器から7世紀前半と考えられる。



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第6図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[15.2]	4.3	—	長石・石英	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後一部ナデ 内面丁寧なナデ	貯蔵穴下層	40% PL2
2	土師器	坏	[12.2]	4.0	—	長石・石英	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面へラ磨き	床面	40% PL2
3	土師器	碗	[18.4]	9.8	—	長石・石英	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後丁寧なナデ・一部へラ磨き 内面ナデ	竈焚口部	60% PL2
4	土師器	甕	17.3	(25.4)	—	長石・石英・小礫	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	床面	90% PL2
5	土師器	甕	14.9	(13.7)	—	長石・石英・小礫	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ 輪積み痕	貯蔵穴下層	50% PL2
6	土師器	小形甕	[10.7]	11.9	6.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内外面ナデ 底部一方向のへラ削り	貯蔵穴下層	60% PL2
7	土師器	甌	23.3	(19.4)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部へラ削り後一部ナデ 内面へラ削り後ナデ	床面	60% PL2

番号	器種	長さ	最小径	最大径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	支脚	19.5	2.4	(5.4)	(479.0)	粘土	ナデ 指頭痕	床面	PL2

番号	器種	長さ	最大幅	最大厚	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	敲石	13.9	5.7	4.1	450.0	砂岩	3面に敲打痕	床面	

第2号住居跡（第7・8図）

位置 調査区の東部B 2 e7区、標高26.7mの台地平坦部に位置している。北東コーナー部が調査区域外へ延びている。

重複関係 第2・3号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.96m、短軸3.94mの方形で、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は12~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が、竈部と北西コーナー部を除いた壁下で確認されている。中央部の床面から、やや高い位置で炭化材の広がりも検出された。

竈 北壁中央部に付設されている。調査区域外に延びているため焚口部から煙道部までの規模や袖部幅は不明である。袖部は、左袖部のみが確認された。左袖部はローム混じりの粘土が主体で、一部が灰色粘土で構築されている。火床部は、床面と同じ高さであり、赤変した部分は認められなかった。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|-------|----------------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土ブロック多量、白色粘土ブロック・ローム粒子微量 | 5 灰色 | 灰色粘土粒子極めて多量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・白色粘土粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム混じり粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、白色粘土粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・黒色ブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 | | |

ピット 7か所。P 1~P 3は深さ36~40cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 4は深さ16cm、P 5は深さ22cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ22cm、P 7は深さ36cmで、補助柱穴と考えられるが明確ではない。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1・2ともに南東コーナー部に位置している。貯蔵穴1は径63cmほどの円形で、深さは36cmである。底面は平坦で、壁は直立している。貯蔵穴2は径60cmほどの円形で、深さは22cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴1・2とも各層にロームブロックと炭化物が含まれ、埋め戻されたと考えられる。覆土の様相も酷似しており、同時期に存在したのと考えられる。

貯蔵穴1土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 |
|-------|----------------------|-------|----------------------|

貯蔵穴2土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物微量

覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。第11~13層は貼り床の構築土である。第14層はP6の覆土である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

9 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

10 褐色 ロームブロック中量, 黒色ブロック微量

3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

11 暗褐色 ロームブロック中量, 黒色ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

4 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

12 暗褐色 ロームブロック中量, 黒色ブロック少量

5 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

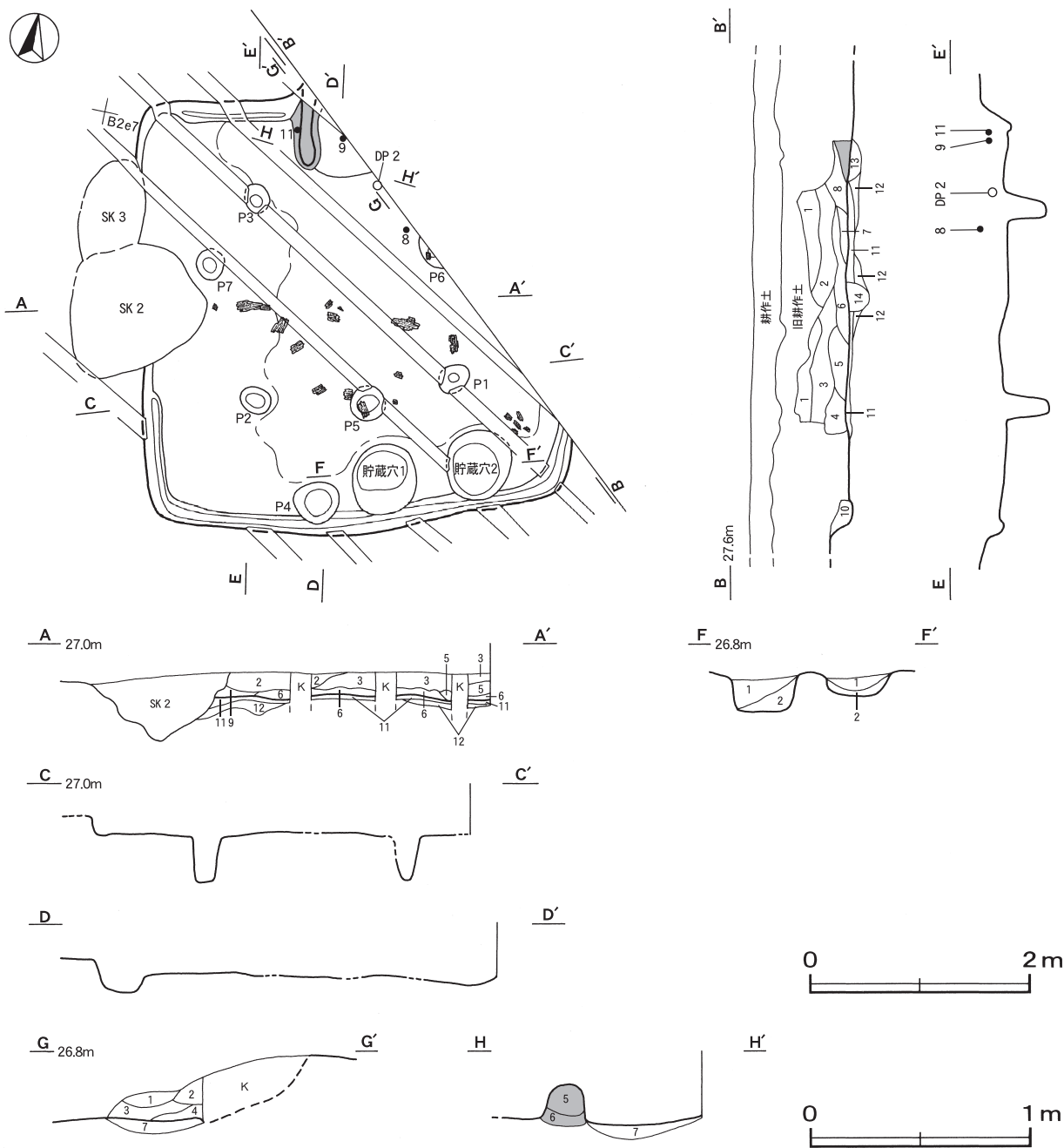
13 暗褐色 ロームブロック・黒色ブロック中量

6 黒褐色 炭化物多量, ロームブロック・焼土粒子少量

14 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

7 褐色 ロームブロック中量, 炭化物・焼土粒子少量

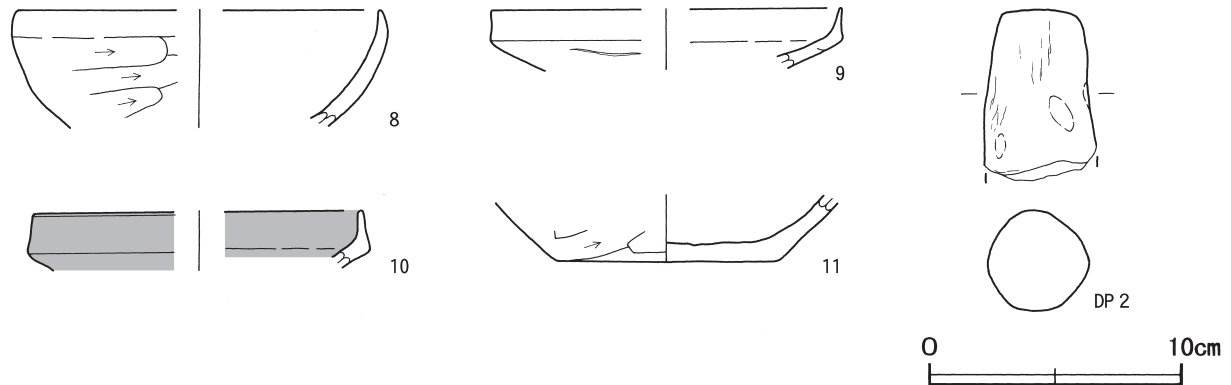
8 暗褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子微量



第7図 第2号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片37点（坏5，甕類32），土製品1点（支脚）が出土している。遺物はいずれも破片で，8・9・11・DP2は，竈付近の覆土上層から中層にかけて出土している。

所見 覆土中に炭化物を多く含み，炭化材の広がりも検出されていることから，焼失住居と想定される。遺物は細片であり，時期判断は難しいが，出土土器から7世紀代と考えられる。



第8図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
8	土師器	坏	[14.4]	(4.7)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ り後ナデ 内面ナデ	体部外面へラ削	覆土上層	25%
9	土師器	坏	[14.0]	(2.4)	—	長石・石英	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ なナデ 輪積み痕	体部内・外面丁寧	覆土中層	10%
10	土師器	坏	[13.0]	(2.3)	—	長石・石英	灰黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	体部内・外面ナデ	覆土中	10%
11	土師器	甕	—	(2.7)	[8.8]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	体部へラ削り後ナデ	内面ナデ	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	最小径	最大径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP2	支脚	(6.9)	3.1	(4.4)	138.8	粘土	ナデ 指頭痕	覆土中層	

表2 住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	出土遺物	時代	備考 重複関係 (古→新)
								主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
1	B2e5	N-9°-W	方形	5.11 × 4.93	15~21	平坦	全周	4	1	6	竈	1	人為	土師器,土製品,石器	7世紀前半	本跡→SK1
2	B2e7	N-17°-W	方形	3.96 × (3.94)	12~22	平坦	ほぼ 全周	3	2	2	竈	2	人為	土師器,土製品	7世紀代	本跡→SK2・3

2 その他の遺構と遺物

出土遺物などから時期及び性格を判断することができなかった遺構は，土坑5基，ピット3基である。以下，それらの遺構と遺物について記述する。

(1) 土坑（第9図）

時期及び性格不明な土坑5基が確認された。いずれの土坑も出土遺物はなく，明確な時期は不明である。第2号土坑は，形状と覆土の様子から風倒木の可能性が考えられる。以下，実測図と土層解説を掲載する。

第1号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第2号土坑土層解説

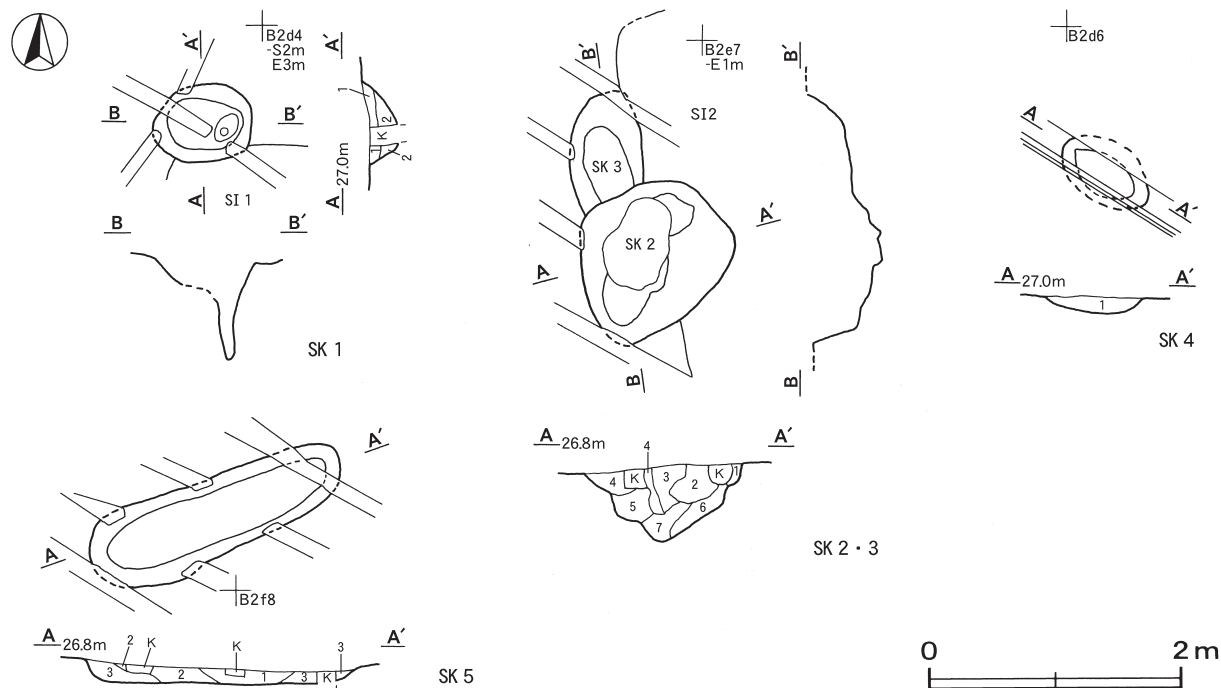
- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量

第4号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量

第5号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量



第9図 土坑実測図

表3 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸) (m)	深さ (cm)					
1	B2d4	N-90°-E	楕円形	0.79 × 0.62	22	外傾	平坦	人為	-	SI1→本跡
2	B2e7	N-68°-E	隅丸台形	1.28 × 1.14	55	外傾	凹凸	自然	-	SI2・SK3→本跡, 風倒木痕カ
3	B2e7	N-5°-W	[長楕円形]	(0.82) × 0.56	34	緩斜	平坦	-	-	SI2→本跡→SK2
4	B2d6	N-54°-W	楕円形	0.80 × [0.50]	13	緩斜	平坦	人為	-	
5	B2e7	N-67°-E	長楕円形	2.11 × 0.70	16	緩斜	平坦	人為	-	

(2) ピット (第10図)

この項で取り扱うピットとは、土坑にするには小さい径0.4 m以下のもの、柱穴状の掘り込みを残しているものとした。柱穴の可能性も考えられるが、建物構造を把握するには至らなかった。以下、実測図と土層解説を掲載する。

第1号ピット土層解説

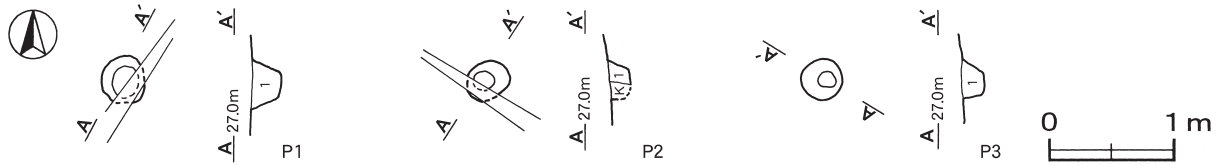
- 1 黒褐色 ロームブロック少量

第2号ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

第3号ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量



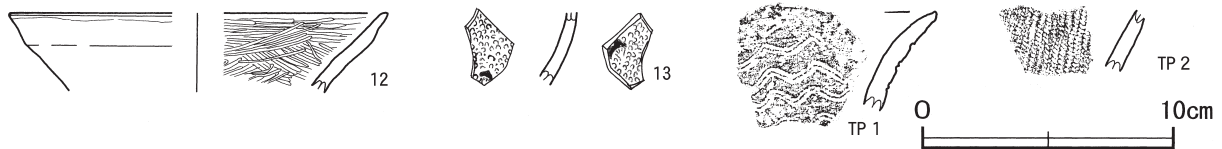
第10図 ピット実測図

表4 ピット計測表

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	[38]	[35]	24	P2	[34]	30	16	P3	32	30	18

(3) 遺構外出土遺物 (第11図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表で掲載する。



第11図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
12	土師器	坏	[14.8]	(3.1)	—	長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面へら磨き	SI1	10%
13	磁器	碗	—	(2.8)	—	緻密 透明釉	灰白	良好	内・外面微塵唐草文 印判	遺構確認面	瀬戸・美濃カ

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP1	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部沈線による振幅の大きい波状文	SI1	
TP2	弥生土器	壺	長石・石英	褐	普通	胴部LRの単節縄文施文	SI1	

第4節 ま と め

今回の調査では、古墳時代の竪穴住居跡2軒のほかに、時期不明の土坑5基、ピット3基が検出された。ここでは、第1号住居跡の時期について出土土器から検証し、まとめたい。

県内から出土した古墳時代後期から終末期にかけての土器編年は、樫村宣行氏・浅井哲也氏が久慈川・那珂川流域における遺跡出土の土器に検討を加え、まとめられている¹⁾。両氏の編年から、出土土器の時期判断をする。

第1号住居跡から出土した土師器は、坏・椀・甕・甑である。そのうち坏2点（第6図1・2）は、内外面黒色処理されたものである。1は、体部は内彎気味に立ち上がって口縁部が短く直立し、須恵器坏蓋模倣の坏類である。底部は平底気味で、外面はへら削りによって調整されている。2は、須恵器坏身模倣と考えられ、やや高い位置に稜をもち、内傾して立ち上がっている。内面はへら磨きで、外面はへら削り調整が施され、器高は低めで扁平化している。

また椀は、3の1点であるが、口縁部は横ナデによる調整が施され、口縁部と体部の境にわずかながら稜が認められる。口縁部がやや外反気味であり、深めの造りである。

甕は3点で、4・5は、口縁部が「く」の字状を呈し、長胴化が進んでいる段階のものである。体部外面はへら削りで、口縁部は横ナデによる調整が施されている。また6は、頸部はくびれないで、底部が平底であり、法量から小形甕と判断した。7世紀前半の小形甕は両氏の編年によれば、「頸部のくびれが弱くなり、口縁部が短く外反する」²⁾としているが、6は、この時期の小形甕の客体的な形式と推定される。

甑は7の1点で、体部がほぼ直線的であり、口縁部と体部の境にくびれをもたず、体部からそのまま外反している。口縁部は強く外反し、体部外面もへら削りによる調整が施されている。

以上、第1号住居跡の出土土器について観察を行なったが、これらの土器の特徴から時期判断をし、7世紀前半の住居跡と結論づけた。なお第2号住居跡については、土器が小片のため、時期を絞り込むのが難しく、7世紀代とするにとどめた。

今回の調査によって確認された住居跡は2軒だけであるが、集落の立地から見れば、集落は調査区域外の北東部に広がっているものと考えられる。今回の調査は遺跡の一部で、集落の全体像を把握するのは難しい。今後、当遺跡を含めた周辺地域の調査研究によって、東海村域における古墳時代集落の様相が、より鮮明に解明されていくものと考えられる。

註)

- 1) 樫村宣行・浅井哲也「常陸地域の鬼高式土器—久慈川・那珂川流域を中心として—」『月刊考古学ジャーナル』第342号 ニュー・サイエンス社 1992年1月
- 2) 前掲文献1)に同じ

参考文献

- ・浅井哲也「古墳時代の土器—常陸の古墳時代後期の土器編年確立に向けて—」『紀要』第34号 茨城県立太田第一高等学校 1998年3月

写 真 图 版

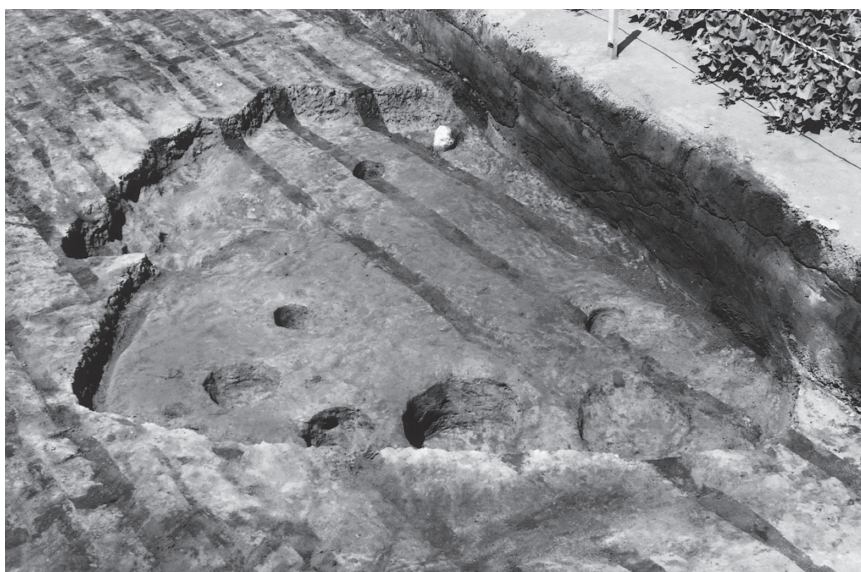
第 1 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 1 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 2 号 住 居 跡
完 掘 状 況



PL 2



第 1 号住居跡出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第302集

田 向 遺 跡

主要地方道常陸那珂港山方線新設事業地内
埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書

平成20(2008)年3月19日 印刷

平成20(2008)年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL 029-252-8481